

ぞあるかいみにすべし女らよと月の光に筆とりつ。

乙未秋十月

稼堂陳人批

第五高等學校開校紀念式の歌

助教授 園 哲雄

阿蘇の峰より

いや高き

君が御蔭に

立初めし

學びどころの

さうえゆく

その本つ日を

こどほぎて

本にむくいん

眞心の

あかきはやがて

日の本の

光ともなり

大君の

御稜威やち代に

ういやかむ

述懷

禾の舍あるじ

君をおもふ道一筋をたかへすは骨はかりとも身はならはなれ

小濱道中小學子どもの車をねひくるがらうかはしくて

車にゆられながらかきて與へける

たれか子を跡ねふをの子あはれやとみるもわか子に思ひあはせて

山中に水の上下にながるゝあり

末終に海にこそ入れ溪川のゑたゆくもあり上ゆくもあり

藤の谷橋といふ橋のかゝれるに

山高みかゝる坂路をいつまでかよち登れとやふちの谷はし

卷煙草

いとまある身にもおもひの煙草ふきたてゝゆくいとかしの世や
いそかしき中にもひまはありとかやたはこまきくのむ人もあり

第五回開校式紀念會を祝して

硯友會員 下山 陸 治

うちむれてことほきぬれは竜田山まつ嵐も音たつるなり

全

硯友會員 本田 弘

松か枝に吹く秋風も諸聲に聲や立つらん今日祝ふかに
竜田山色つく秋の紅葉の錦かさらん末の樂しさ

全

硯友會員 石橋愛太郎

いや榮ぬさかゆる文の花園を開きし昔祝ふうれしさ
もろ人の心つくまの文の園榮へ行く名も世に高きかな

寄松祝第五回紀念式

窪田 常 吉

あづさゆみ

春の若葉はなつしげり

秋には散らず冬かれず

植ゑこし日より五年の

月はいつしかたつた口

流れて盡きぬえら川の

えらぬ幾世の末かけて

榮へ行くべし園の小松は

第五回開校の紀念にあたりて喜びの余りに歌ひ出づる

硯友會員 吉 丸 一 昌

紅葉てりそふ竜田山

月のうつらふ白川の

清きも人のこゝろなり

赤きも人の心なり

こゝろ一つの祝ひして

富士より高きすめらぎの

みかげにたてる文の舎を

ことはぐ歌を諸聲に

うたひ出づれば波の音

峰のあらしも諸共に

いはふ今日こそ樂しけれ

月下虫

硯友會員 松 露 生

はれ曇りさためなき世をうつらん聲たぬくに虫そなくなる

故郷薄

吹風になひく尾花の袖たにも故里寒く秋はきにけり

行路虫

武士う秋野の露を分けゆけは玉ちる下にくつは虫なく

山家秋曉

硯友會員 蝶々子

小男鹿の妻とふ聲のたえはて玄後に残れる有わけの月

源頼朝

石橋の伏木隠れのはとゝきす鎌倉山に名のりいてつゝ

楠 公

みなど川よしや流は絶ぬれども君か勳ハ千代もつさせし

深山の月 (舊作)

小嶋嶺月

深山の月のさやけさに

すきにま事を忍はるゝ

山より山に尋ね入り

谷より谷にさすらひて

こゝに庵を結ひしは

去ぬる年の秋の空』

谷の小川にみそきまて

思ひの塵を洗ひつゝ

み山の人とはなれりしか

こゝにも年の春すきて

いつしか秋のめぐりきて

あはれ昔を語るなり』

ふりさけ見れば野も山も

色つきそめて草も木も

打見るさへもあはれにて

こねの嵐の聲すこゝ

月より落つる雁らねの

おのへに入るもあはれなり』

見渡すかきり思ひての

浮世のすがたなけれども

都に出てし月見れば

去にし昔の忍はれて

山の奥にも照りますは

なほ棄てし世を忍へどや』

けにも昔の世棄て人

世を棄て乍らしろすかに

『月すむ秋になりぬれば

なからへすは』と歌ひけり

我も月ゆへかこつなり

昔を語る友として』

松吹く風の物凄く

其風にまもまえられるは

悲まき鹿の鳴く音なり

汝ハ妻をしも求むらん

吾は妹をも振すてつ

心を月や知りぬらん』

笑ひやすらん人みなは

怨みやすらん吾妹子ハ

さはれ濁れる世の塵に

なからへしとて何かせん

思ひつゝけてうそふけば

傾く窓に月をすむ

曉海

皎々子

曙ゆく空の東雲の

白濱傳ひすきゆけは 何處をはてと白浪の

幾重ともなく霧立ちて 其遠近に岩か根の 影をひたすと見るほとに

いつしか消れて跡もなく 四方の姿は顯はれて 峯に聳ゆるそなれ松

風の調へとさやかなる

遊浦戸城墟記

川田鐵彌

余嚮往來攝播之間遂經三備航海西遊鎮西鎮西之地山峻水清文化大興士庶彬彬俯仰今古有可以暢襟懷者焉然而一旦想馳故山每夢鄉里之事未嘗不感慨也今茲乙未夏七月余海路歸鄉船蹴洪濤而過浦門左丘有古松斜睨浦門遺愛猶存使人顧眄慕之則長曾我部氏城墟所在也越數日適屬陰曆五月既望遊興更勃然味爽與弟出家而東南行一里至於松端賃舟從流而下至臺山之濱山麓有大嶋祠遙拜而過坐舟而眺西北巖然聳于空際者山内氏舊城之所在東北老松鬱然如有鬼神呵護之者臺山諸院之所在南則雙朶山挾浸對聳洞然如門北則青柳橋蜿蜒浮空如虹飲水日午舟至朶門左右